

# 存在被拘束性と共有意味の様相について

宇 治 琢 美

## 緒 言

唯物史観を総体的に把握せんとする試みに執拗につきまとう難問は、逆説的な表現を敢て用いるならば、全体的な歴史の空間のなかで占める所謂「経済的土台」の位置を巡って湧出してくる。無論、歴史の研究にとって陰湿な呪いにも譬えたくなるこの難問は、マルクスの把える人間を自己保存本能で一色に塗り潰された蜉蝣の幼虫にすぎないものとし、フロイトが前提とする人間を生殖本能で全的に規定されたその成虫と看做する者には免れているし、一方、「矛盾」と「発展」の物質法則を「人間の意識を超えたところ」で実体化し、（こう言って差支えなければ）遊女が客に身を委ねるような安逸さと懈怠のなかで形而上学（これとの絶縁こそマルクス主義の信条であったはずなのに）の古巣へ帰り、老衰の境に自己を捨て去る幸福な弁証法信者ないしはマルクス教信徒にも、免れている。したがって、この小論に於いて筆者は、筆者自身まだ便々として思いを空に漂わせている事実を認めながらも、闇の中にその糸口をつかまえたいと願っている問題について、即ち、歴史の過程を通じて共同差別的な意味（これについては後ほど明らかにする）という臍帯の中にまどろんでいる共同体諸成員が、「経済的土台」の運動に揺さ振られて無差別的個人として自立化し個別化されてくるといふマルクスの立てたこの上なく魅惑的な仮説について、この点に関しては一応マルクスの推論を肯定しながら（なぜなら経験的現実はこの過程を示し始めていると思われるから）、そこで前提されている共

---

(1) “Warum ist die Psychoanalyse populär?” に於いて B. Russell によって用いられた比喩, E. Fromm “Über Methode und Aufgabe einer analytischen Sozialpsychologie” *Zeitschrift für Sozialforschung*, Bd. I, 1932, S. 40

同差別的な意味の存立条件を、これもまた仮説的にそこから（少々強引に）剔抉してみようと思う。

## I マルクスの「現実性」について

マルクス教信者にとっては無論のことその教祖にとっても明々白々のことは、<sup>(2)</sup>「人間の本質とは、実のところ、社会的諸関係の総和である」という謂わば唯物論的経験論から生まれた命題であり、かつまた、こうして把えられた人間が、結局は宙に浮かんだものでしかない（という）フオイエルバッハの *der Mensch* を現実性という面で大きく凌駕しているという判定である。人間が生きることのできる場は、唯一、一定の生産諸力に相応して実在しているナマの社会的諸関係であり、たとえば魚の生態（或は「本質」）がその境位である水の性状によって規定されているように、人間のパーソナリティという秘密を解く鍵もまた必然的にその境位である社会に求められねばならない（この方法に関してはフオイエルバッハが先輩であるが）。然も規定要因は自然科学的な厳密さでもって確認されるものでなければならぬ。なぜなら、この方法を採用して初めて、あの<sup>(3)</sup>蠱惑的で老獪なヘーゲルの観念論からきれいさっぱり足を洗うことができるし、またその事実を欣然として世に誇示することができるからである。不透明なものは歴史空間から容赦なく駆逐すればよいという確信、この確信は勝利の凱歌に浸りながら、加速度を増して、「<sup>(4)</sup>そもその初めから明らかなことは、人間相互の唯物論的な<sup>(5)</sup>連がりである」という確信を分婉し、剩<sup>(6)</sup>え、「その上人間を結びつける何らかの政治的もしくは宗教的な戯言など要らぬ」というこわいものなしの名台詞を披露した。この唯物論的経験論、まさに旭日昇天の勢いである。

現実的人間とは現にあるがままの人間であり、人間の頭脳が生み出した様々な観念を虚像と把えることによってむき出しになってくる実像であり、日常生

---

(2) K. Marx "Thesen über Feuerbach"

(3) id. *Die deutsche Ideologie*, Dietz Verlag Berlin 1959. S.30

(4) a. a. O.

活のなかで内的外的な圧迫を蒙りながらその都度それに反応している、或は反応せざるを得ない人間である。日常生活のなかでわれわれの行為を誘発する圧迫は数多けれど、なんととってもその筆頭は物質的欲求と絡み合った圧迫であろう。この欲求と連がりをもった活動こそ生活の基礎であり、生命の源泉であり、したがって歴史の根底でありその前提でもある。この厳然たる事実から目を逸らせるお上品な歴史観は、人間を他の動物から截然と区別することによってそれを万物の靈長にまで高め、胃袋を喪失した（或は胃袋を恥ずかしそうに懷中に潜ませた）人間を幻想的な「樂園」のなかに描いてきたのである。「ここに一切の虚飾と羞恥を拭い去れ！」これが唯物論的経験論の定言命法である。

物質的欲求と何の関わりももたない情緒情動的諸内容（これを無責任に非合理的要素と名付けることが一般的慣例となっているようだが）は、それが要因となって人間を行為へ駆り立てる度合いが比較的小であることから、換言すれば、人間にとって日常的圧迫たりうるものが比較のまれであることから、「現実的」と呼ばれる資格を欠いているという今日の世に一般化している暗黙の了解は、確かに、われわれが今日のシラケぎった日本の社会に生きているという特別の条件を考慮に入れた場合、まことに無理もない姿勢であると言えないこともない。この点から捉えれば、それまでの謎めいた歴史観に対置させて「現実的な」それを構築しようと息込む青年マルクスの根本了解は、今日の社会に生きるわれわれ凡人の無意識的前提と、或は、たとえ商品交換と貨幣が未発達な時代にあっても、いずれ社会が無味乾燥にシラけるであろうことを先駆的に察知した人のそれとも、たいした逕庭はなかろう。しかしながら、物質的欲求と何らかの関わりをもつ行為こそ唯一現実的な行為であり、物質的生産活動に携わる人間こそが唯一現実的な人間であるという判断は、何らマルクスの言う「イデオロギー」の力を滅殺するものではない。なぜなら、物質的欲求という基本的欲求もまた、実のところ、一個の歴史内相対者であるし、更に重要なことは、少々カント的な表現をまねれば、この「内容」もまた発現する際には、その時その時の（カントの言う先天性を裏切ることになるが、それ自身歴

史的に規定された) 様々な「範疇」という枠組を通過せざるを得ない宿命をもっているからである。このことは炯眼なマルクス自身一方で認めているではないか。いわく、「大工業は可能な限りイデオロギー、宗教、道徳等を根絶した。そしてこれができない場合には、それらを見え透いた嘘っぱちにしてしまった。……それは至る処で社会の階級間に同一の関係を生み出し、こうして個々の国民性という特殊性を減ぼしてしま<sup>(5)</sup>った。」これこそ、物質的欲求の自立性そのものを歴史内に相対化させ、「そもそもの初めから明白な人間相互の唯物論的連がり」の「明白さ」を不明瞭にし、急転してフオイエルバッハの *der Mensch* を現実性という面で決定的に凌駕した「社会的諸関係のアンサンブル」としての人間の把握を困難にし、そして、マルクスが師匠に倣って歴史を回顧的に反省する際前提としている、或は下敷きとしている、資本制社会がこのまま進展すればいずれそうなるであろう人間の姿を浮き彫りにしてくれる、命題なのである。

マルクスが一貫して「蜉蝣の幼虫」としての人間を固持していたならば、彼の人間論に対する批判は、無論、「人間とは断じてそのような下等な動物などではなく、その本質を精神として規定された崇高な生命体である」という高貴な立場からの戒めはともかく、人間の尊厳さとか意志の自由を守ろうとする立場に立たずとも、実証的なもしくは常識的な立場から充分可能であろう。「人はパンのみにて生きるに非ず」という一つの教えは、俗人の立場からこれを強引に把え直せば、神と動物の中間に位置する人間は、物質的欲求以外の高級な生命財をも携えているということの意味するのではなく、人間はパンを巡るという一見極めて単純な関係の中にあっても、杳としてつかまえることのできぬ複雑な意味連関の中に嵌め込まれており、排他的自己保存本能がパンと裸のままでも対面するためには、人間が単なるエゴの主体に即ち生理的「組織」に帰る極限状況を俟つかないということを示唆している。一方で、空想的観念論の戯言に対する勢いづいた痛罵から、極度に人間を単純化させこの意味で抽象化さ

---

(5) *ibid.* S.50

せたマルクス自身、人間の欲求を人間の意志から独立して実在している経済的諸関係の中で相対化することによって、「蜉蝣の幼虫」としての人間、即ち、個別的かつ専一的にその物質的欲求を充足させる条件が与えられた人間そのものを、歴史的過程の産物にしているのではないか。然らば、日常生活の中で生産活動に勤しんでいる社会的諸関係の総和としての人間は、フオイエルバッハの *der Mensch* に負けず劣らず抽象的で空想的な人間でしかない。つまり、物質的諸条件を土台としてそこから短絡的に構成された人間など、歴史を通じてどこにも実在したためしはない。そのような人間は、無国籍はともかく、いずれの人種・民族・慣習・伝統・言語にも属さぬ、然も、ある特定の意味を担わされたそれらの中に設置されぬ観念の産物でしかない。人間を一定の生産諸関係の中に据えつける操作でもって、現実的人間の構成が完了したかのように思い込み、鬼の首でも取ったように欣喜雀躍しているどうしようもないほど脳の軽い唯物教信者は、歴史を回顧しかつ展望する際マルクスが単純にもしくは「先見の明」でもって前提した人間を、即ち、（後でその過程を辿ってみるが）共同差別的な文化（最広義の意味での）が、換言すれば、ある集団の諸成員が共有している他の集団のそれと差別をもった文化が、歴史の運動に揺さ振られて質的に無差別の文化へと変容ないしは収斂すると仮定される場合に、この過程と平行して生成する（であろう）質的に一般化されつつ個別化された人間を、このような歴史の運動とは無関係に超歴史的に実在している人間だと夢想しているのである。それは恐らく、彼らがその師の「科学的」偉大さに惑溺したためか、或は、今日のわれわれ日本人に歴史的過程を通じて贈与された、これといった共有文化ももたぬ「自立的個別者」という了解のせいであろう。この意識が単なる幻想的な自惚れにすぎないのかどうかは、明日からの歴史がまざまざと示してくれるだろうが、それはともかく、よく言って懶惰な悪く言って間抜けな唯物教信者が「上部構造」なるものの中に無造作に放り込んだ現実的諸意味の変遷過程を、マルクスが先取りしかつ今日われわれが信じこんでいる無差別的個別者を引き出すことを念頭に置きながら辿ってみることにしよう。

## II 共同差別的な意味の崩壊過程

「歴史を遡及すればするほど、個人は、したがってまた生産する個人は、ますます非自立的なものとして、一つの大きな全体に所属するものとして現われる。……18世紀のブルジョア社会に至ってようやく、社会的連関の様々の形態は、各人が私的な目的を遂げるための単なる手段として、したがって外的な必要物として、各人と向かい合うようになる。」ここでルソーを反面教師に仕立ててマルクスの主張の正しさを再度強調する必要はない。目下のところこのような主張が最も説得力に富んでいるからである。「自然成長的な種族共同体、或はこう言ってよければ群居集団が最初の前提である。」この点に関しては何人も満腔の信頼を寄せなければならない。生産力が未発展であるから生産諸条件は共同的に所有されねばならず（こうしなければ共倒れを招く）、共同体諸成員は土地は固より自分の労働すら私有することが許されず、共同体を維持することによってのみ自分を維持することができる。このような「現実」の諸条件の中では、「自我」の意識の発達は極度に限定されていると見るのが常識的であろう。無論、いかに共同体諸成員が日常的現実の中で共同的生産活動に縛られているとはいえ、身体は常に個体として実在するから、ここにも「他者」の意識と「自己意識」は見られるであろうが、マルクス流に「対象的存在」としての人間のパーソナリティを唯物論的に把えるならば、身の回りに見出す財がほとんど共同所有という了解を表現しつつ実在しており、なおかつ、これもまた自分のものであって実は自分のものでない労働が、共同的諸活動のなかで *beseelen* される状況にあっては、諸成員の日常的な配慮の交渉（対象的活動）を通して自我の意識が目覚めてくることは余り望めないであろうし、ましてや、今日に生きるわれわれが不遜にも「日本人である前に人間である」と豪語できるような幸運な諸条件にめぐり逢うことなど考えられない。つまり意識は物質

---

(6) id. *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, Europa Verlag Wien, S.6

(7) ibid. S.376

的「土台」に於いて「われなるわれわれ、われわれなるわれ」でしかない。然らば、「われなるわれ」を贈呈してくれる物質的「土台」とは何か。それは「われなるわれわれ」の存立条件を吟味することから必然的に生じてくるのだが、ここで一応確認しておく、生産力の発展が共同体諸成員に対して、その手許に私物の烙印を押された財をもつことを許す情況であり、「各人の所有物が共同的労働によって利用されることが少なくなり<sup>(8)</sup>」私的所有と分業に随伴する自由交換が一般化する情況であり、アジアの所有の場合にはその諸成員に対して頑強に拒絶されてきたような「対共同体<sup>(9)</sup>」の経済構造が生成してくる情況である。とりわけマルクスがここで強調しているのは、私的所有と分業を、更にそれらの発生を可能とした生産力の発展を自己の前提としつつその中に内包している交換である。交換こそ、それまで共同体の中に物質構造的に組み込まれ、自己を対自化する可能性を「現実性の次元で」拒否されてきた諸成員を、「現実性の次元で」共同体から浮かび上げらせ、共同体に対して *gegenüber* の関係に立たせ、交換相手を目的と立て自己をその手段へと落としめながらも、自己を究極目的と立てることによって交換相手を手段に落としめる「論<sup>(10)</sup>理」を通して、諸個人に「個別的自我」と「対等の他者」とを発見する主要な杆槓だからである。なるほど「交換は群居集団を余分なものと化し、それを解体する<sup>(11)</sup>」が、ここで解体するのは、一個の単位 *Einheit* として実在し、諸個人に対してそれぞれの自我を究極の目的として把握することを許さず、全体の維持が部分の維持の唯一の条件であることによって支えられている共同体であって、無論、経済的諸関係を基礎とした社会そのものではない。したがって諸個人は、社会の内部にあって交換を通じて自己を対自化させるのであり（これこそ唯一可能な対自化であるが）、絶海の孤島に辿り着くことによって独立独歩の唯一者を手に入れることは入れたが結局は跛行しているにすぎないロビン

---

(8) *ibid.* S. 378

(9) *ibid.* S. 386

(10) *ibid.* S. 155

(11) *ibid.* S. 396

ソン・クルーソウになるのではなく、文字通り排他的「一」と自己否定的「多」を aufheben した個別者になるのである。

ところで、この小論のテーマはこのような概観的経済史ではなかった。問題は一貫して共同差別的な諸意味の崩壊過程であり、次章で見るとようにその在立条件である。この点を考えてみよう。

既述したように、マルクスは実に正当に前提としての共同体を指摘してくれた。ところでこの共同体は、ただ一定の生産力段階にあるというだけの無色なそれではない。われわれの関心から言えば、何よりもその共同体は「血統・言語・習俗を共有する」単位として実在し、<sup>(12)</sup>「その即自的に存在する統一が、起源と共通の過去・歴史の中に置かれ」<sup>(13)</sup>ている基体として前提されている。そして、まさにこうした共同体によって本源的に共有されている血統・言語・習俗・出生・過去・歴史等の現実的な意味が、その共同体を他の共同体と質的に差別する日常的文化（これこそ現実に生きられる文化でなくて何であろう）である。差別は断じて事実的提定として死物化されてはならない。それは共同体諸成員によって現実に生きられる意味として、生命の息吹きが与えられなければならない。マルクスはこのことを付随的に暗示しながらも、主題的に考察する労をとらなかった。何故か。第一には、彼は、既に述べたように、このような共同差別的文化ないし意味が、つまり、共同体諸成員を共同的に他の共同体諸成員と差別する特質が、いずれ資本制生産様式の発展と共に雲散霧消するであろうという仮説を立て、かつ、来たるべき無差別的に個別化された人間を先取りしつつ、その未来の人間像を下敷きとして過去の歴史を回顧しているからであり、第二には、このような本源的な質的差別の实在を指摘しながらも、やはり、それ自体物質的諸条件を Sein とする das bewußte Sein にすぎないものと把えることによって、「科学的」唯物論への忠誠を貫いたからであり、第三には、共同差別的な文化の蔽然たる实在に対する深層心理学にいう抵抗 Widerstand が、マルクスの潜在意識の中に宿命的に根づいていたからと思わ

(12) ibid. S. 376

(13) ibid. S. 382, 3



れる。それはともかく、われわれの仕事を続行しなければならない。

人間をある一定の階級関係の中で把えさえすれば、それだけでもう「現実的な」人間をつかまえたことになると思ひ込んだり、或は、「現実的な」人間の全体像を構成するための土台を手に入れたのだと祝盃をあげているおめでたい階級信者の数は、今日でもまだ結構多いと思われる。彼らはその教祖を楯にとつてオオムの模倣癖よろしく言うかもしれない、「ここで人間を問題とするのは、彼がただ経済的カテゴリーの人格化であり、一定の階級関係と利害の担い手である限りにおいてである」と<sup>(14)</sup>。しかし、繰り返して強調しておくが、このような幸福な人間自体（仮に実在しうるとして）一つの歴史的発展の産物ではない。マルクスが、天に峙つ大樹の陰に簇生する饒舌なきのこなど気にもとめず承認していることは、本源的人間としての「他者との自然的な類の連がりという臍帯がまだとれていない」<sup>(15)</sup>共同体諸成員であり、「ローマ人、ギリシヤ人等の特定の（傍点筆者）個体として規定された」<sup>(16)</sup>未熟児であり、「偏狭な（傍点筆者）国家的・宗教的・政治的規定」<sup>(17)</sup>を身にまとつた被後見人である。無論、このような気の毒な人間にあつても、その社会に階級関係を指摘することは容易かもしれない。しかし、既に昔話しとなつてしまつた批判から、つまり、マルクス主義が実存哲学（なかんづくサルトルの）の空虚な抽象的主体性を暴露した批判から、その際きまつて用いられた言葉を借用すれば、階級関係もまた「一定の」歴史空間の中に実在するのであり、この限定性を見落とすならば、マルクス主義もフオイエルバッハの *der Mensch* へ帰省するしかないのだ。本源的人間とは共同差別的諸意味が色濃く塗られた共同体成員である。この成員がなぜ無色の個別化された個人として成熟するのか。なぜ共同差別的諸意味ないしは諸規定が、歴史の流れの中で漸次剥落してしまうのか。そしてなぜ同質的な階級内個人としての万国の労働者が互に手を結び合うことが可能と

(14) id. *Das Kapital*, Bd.1 Dietz Verlag Wien, S.16

(15) ibid. S.93

(16) *Grundrisse*, S.394

(17) ibid. S.387

なるのか。この疑問を解く鍵こそ、「経済的土台」の運動の中に見出されねばならない。

共同体諸成員が共同体から経済的に自立していくための条件とその過程は既に見た。私的所有と自由交換がその主要な槓杆であったわけだが、更にこの自立化を助長する手段ないしは関係であり、共同体の玉座を篡奪する役を演じる貨幣が、この過程が進行している事実を総括的に表現しているし、また、それを可能とする生産力の発展した段階をも暗示している。ところでその際マルクスは、「各人の共通の性格がますます対外的には消極的な統一として現われるし、またそう現われざるを得ない<sup>(18)</sup>」と述べた。つまり、たとえ生産力の発展が不幸にも二重の意味で自由な労働者の群れを生みだしたとしても、それは、共同差別的な文化の「煩わしさ」から諸個人を平均的に解放してくれる救い主でもあり、他人をそして社会を単に生活のために利用しまたそれらによって利用される関係を諸個人に与えてくれる力でもあり、更に、彼らを狭隘な共同体的意識の呪縛から解き放して、単一的な経済的規定の下に結合することを可能にしてくれる条件でもある。事態がこのまま進展すれば、つまり、「労働者が一つの生産領域から他のそれへ移り、一つの生産地点からどこか他のところへ移動することを妨げる法律がどれもこれも廃止され、労働者が自分の労働の内容について無頓着になり、……労働者にあらゆる職業的偏見が見られなくなる<sup>(19)</sup>」と、かつて共同体諸成員を共同的に差別していた「共通のものは、（今では）言語くらいしか残されていない<sup>(20)</sup>」という情況が歴史的に現われてくる。その最後まで生き残った共通の言語といえども、もはや特定の意味の下に諸個人を差別的にまとめ上げる媒体ではなく、単なる事実として諸個人によって偶然的に使用されるものでしかない。無論このような推論は先に見たマルクスの根本的姿勢から導出されているにすぎないものだが、それでも、光栄にも今日のわが日本の社会に生きることとなったわれわれは、マルクスの洞察を実に天才的な

(18) a. a. O.

(19) id. *Das Kapital*, Bd.3 Dietz Verlag Wien, S.206,7

(20) *Grundrisse*, S.390

ものであると判断したい気分の中に情態化されているのではないだろうか。

「人間は歴史の過程を通して初めて自己を個別化する。彼は本源的には一つの類的存在、種族体、群居動物として現われる。<sup>(21)</sup>」このような本源的な人間社会にあっては、一つの共同体を他のそれと質的に差別する文化ないしは諸意味が、共同体諸成員を内的に結びつける強力な紐帯となっていることに注目しよう。共同体諸成員は、その共同差別的な諸意味（事実的規定ではない）一人種・民族・言語・共通の過去・歴史・伝統・習俗等一を基体として自らを同一視し合い、その個々の主観はローマ人・ギリシヤ人等の豊饒な内容でもって深奥まで浸され、こうして、これら差別的特質は共同体諸成員の active なもしくは dormant な前提として実在する。この前提が捨象されることによって析出してくる人間は、たとえ彼が一定の生産諸関係の中に置かれ Was und wie er produziert が指摘されたとしても、何ら「現実の人間」を名乗るほど「真実味」を獲得したことにはならず、単に生産活動にのみ従事している名無しの従って根無しの亡霊でしかない。本源的人間とは、共同差別的諸意味の紐帯で保護されなければ生きれない、情ない人間である。そして、私的所有と自由交換の発展によって余分なものにされる共同体とは、或は、貨幣が分業化を加速度的に助長していく中で自然的生産関係が喪失していくものとは、従って、マルクスが本来的には抽象化させてはならぬと訓戒しながらも揚棄すべき所与として弾劾した社会が唾棄したものとは、この共同差別的諸意味を内実とする紐帯なのだ。

貨幣（一定の貨幣価値ではない）万能の今日の社会に生きるわれわれにとって、特に恵まれた歴史を近い過去に天から授かったわれわれ日本人にとって、差別的な共有文化の重みが漸次確実に軽減している事実をなまじ論理的次元で追求するようなことは、野暮の骨頂かもしれない。しかし、このような無粋な課題とはいえ、有閑な筆者の好奇心を引きつける十分な魅力を備えているので、次に、倨傲無類な個別者の意識を可能にする Sein の構造を論理化してみるこ

(21) ibid. S. 395

とにする。

### Ⅲ 共同差別的諸意味の存立条件（結論）

本源的には種族共同体の暖かくもありがたかつ煩わしい臍帯で繋がれていた人間が、単独的な自給自足的個体という姿で、即ち、「自」と「他」の「矛盾」が揚棄されざる形で自立化するのではなく、歴とした社会関係の中で個別化してくる過程を、共同差別的な諸意味の崩壊過程として把握する場合、例の唯物教信者の如く、その共同差別的な諸意味（文化）の内容そのものの被規定性（たとえば階級性）を穿さくすることに狂奔する必要はない。問題は、ただ、共同体諸成員が自分たちの共有する文化を宿命的な生の条件として固着させる場合の物質的「土台」と、その楯の反面と考えられる、文化を意識の中で偶然的事実に変容させる物質的「土台」とを、論理の枠の中で把えることである。

これまでの推論から既に明らかになったと思うが、共同体諸成員がその共有する文化（文化と呼ぶには余りにも拘束力に富んでいるものであるが故に、現実的諸意味と名づけてきたのだが）を必然的なものとみなして、それでもって各々の個別的意識を特殊的に色濃く染め、課わば運命的にそれらと関係を保っていくことが可能なのは、ほかでもない、それぞれが所属する共同体が一個の経済的単位として実在し、然も、未熟な生産力がその共同体を経済的次元で相対化する可能性を各成員に対し頑強に拒否するからである。彼らが物質的生産活動の場で共同体を一個の全体として「絶対化」する限り、その共同体を差別的に特色づけている文化もまた絶対的なものとして、その諸成員によって対自的に「反省される」こともない。しかしこのことは、文化を内容的に物質的欲求によって規定された「イデオロギー」と看做す見解に与することを意味しない。飽くまでもここでの問題は、本源的に絶対化されていた文化のそのあり方つまり様相を制約する物質的土台である。本源的な共同体諸成員を an sich に「拘束」する文化は、その諸成員が日常的生産活動に於いて共同体の共同的活動の中がっちり組み込まれ、共同的生産が諸成員の生命の維持を意味する限り、したがって、彼らが共同的活動から抜け出る可能性をもたない

限り、それはかよわい彼らを結び合わせる紐帯として絶対化されざるをえない。それ故、たとえば戦争が経済的要請に基く共同体の自己維持・自己発展のための必然的行事だとしても、この経済的要請が意識化される場合は特定の文化を絶対化している諸主観であるということ、そしてこのことが看過されれば戦争も一つの抽象物になってしまうこと、というよりもむしろ、共同体間の戦争が可能なための一つの条件は、その諸成員が、経済的土台に於いて共同体を相対化する条件が与えられていないために、自分の所属する共同体を絶対化するという事の中に見出されるということ、これらのことが忘れられてはならない。ここに、共同体成員が共同体にその生命を捧げる「犠牲」の一つの根拠がある。無論、利他心は物質的自己保存本能によって基礎づけられない。前者は後者の否定に基くからである。したがって、これは共同体諸成員が自分の所属する共同体を一個の「全体」と看做して絶対化することによって可能なのだ。それ故、たとえば自己否定にまで達する愛国心は、国家の絶対化を必須条件とし、この絶対化を物質的土台に起因させようとするならば（筆者はこの方法が可能なものとして推論しているのだが）、国家の絶対化の条件は、その成員が経済活動に於いて国家を絶対化せざるを得ないという物質面での存在被拘束性に求めねばならない。そしてマルクスの言うならば、この状況は未熟な生産力に還元されるのである。

私的所有と自由交換が発展し、貨幣が分業を助長することによって共同体諸成員が経済的土台に於いて個別化されてくる過程は、共同体諸成員によって本源的に共有されていた様々な文化がその現実的な重みを軽減してくる過程である。貨幣経済社会、即ち、各人が他人を利用した他人によって利用される相互利用の関係を随処に生ぜしめる社会は、或は、相互利用という「好都合な」「便利な」関係を生み出すほどに発展した生産力をもつ社会は、もはや、重厚な共有文化など気にせず、ひとり歩きができるようになった社会である。労働地代・現物地代・貨幣地代の変遷は、生産活動に於ける「息づまる」ような「かた苦しい」関係を緩めてくれるし、その上諸個人の活動する場が自由に選べるようにでもなれば、彼らはそこで自分の労働力商品を自由に売り渡して

(労働の疎外など余計なお世話だろう) それと引きかえに何にでも転化してくれる貨幣を手に入れ、あとはこの一般的等価物を少しでも多く獲得しようとする衝動にその身を任じさえすればよい。この上何の共有文化が必要だというのか。自分が何人種に属していようが、自分に何民族の血が流れていようが、「たまたま」自分が属しているにすぎない集団がどんな過去と歴史を生きてきたにせよ、そんなことは個々の「絶対者」には関わり合いのないことであって、いや、それぞれの経済的利害と抵触しない限りどうでもよいことであり、逆に言えば、それらは個別的目的の観点に照らし出されて初めて「有用」「逆行」の意味が与えられる「事実」にまで落としめられてしまう。(ではなぜこの個別化の道が快として選ばれたのか、それは人間を本性的に「自由」を求める「主体」と把える観点からは決して一元的に導出されない。やはり個別的 Dasein を快とする感覚も歴史的産物なのではないだろうか。) といっても、このような個別的絶対者の「居直リズム」を醸し出す土台として、それぞれの「居直リスト」が万国共通の言語をマスターしているとか、どこででも生活するための「普遍的」文化を編み出したとか、或はそのような「度胸」を身につけているという条件が今日見出せるのではない。ただ今日の発展した経済構造がそのような「有難い」相対化能力をプレゼントしているだけである。従って、今日わが日本の「居直リスト」の群れが、意識の上で絶対化する全体を自己とその周辺にしかもたず、それを超える集団を単なる自我に奉仕する手段として相対化し、つまり、別に特定のものに限定せずとも他のものでも充分間に合う交換可能な「多の中の一」の相対者に蹴落とし、身の回りに無数の偶然的他者ないし集団を見ながらそれらと代替可能の了解の下に交渉するとはいえ、またこの過程と雁行して、共同差別的な諸意味がこの日常的諸関係の中で色褪せて行く定めをもっているとはいえ、経済的 Sein の構造がマルクスの夢想したほど普遍化しない限り、共同的差別が物質的「土台」に於いて根絶されることはない。しかし、たとえば日本の近代史を一瞥しただけでも、容易にこの共同差別的な諸意味の崩壊過程を指摘することができることは事実である。直接的な衝動的契機は確かに幕末に於ける「夷狄」の外圧ではあるが、それでも交換

と流通、貨幣経済、そして様々な交通を可能にした生産力の発展をその前提条件として数え挙げることのできる、諸藩軽格武士の「横議横行」<sup>(22)</sup>的連結、即ち共同差別的「藩」の相対化、資本主義の形成と成熟に平行する共同差別「郷土」の相対化と「闔国」の生誕、結果論ではあろうが、共同差別的意味の最後の足掻と看做される「万邦無比」「金甌無欠」の「国体」の猛勢と痛恨の中に迎えたその死、そしてこの「迷惑千万な」共同差別のブザマな断末魔を実に好都合な条件として栄養補給され肥満化した高度資本主義の隆盛と、共同差別的な「日本人」である前に無差別にして実は個別的差別を潜ませた「人間」を選ぼうとする現代人（無論筆者も含まれる）に可能となった相対性の「構造」、こうした事實的諸過程は、「可能性」という次元で把えるならば、別に唯物史観を命と引きかえにでも団守しようと青スジを立てる信者にならずとも、経済的「土台」に起因させることもできよう。ただしそこには、画竜点睛の最後の目玉とも言うべき（個別化に対応する概念としての）「類死」の可能性に関する心のメカニズムが完全に忘れられているか、或は、余りにも軽率にもしくは無責任に前提されている。そしてこの前提こそ、マルクスないしマルクス主義歴史観の最大の欠陥だと強調しておこう。しかしこのテーマはこの小論の域外にある（筆者は目下このマルクスの「汚点」を暴き立てることに専念しているのだが。）

以上、くどくどと縷説してきたのは、要するに、筆者が共同差別的諸意味と名づける日常的文化の事實的崩壊過程を、物質的生産諸力に基く経済的諸関係を「土台」と見立てて、その「絶対性」「相対性」の「様相」を推察した場合、SeinによるBewußtseinの規定は、何よりもこのBewußtseinの「様相」について妥当するということであって、Bewußtseinの「内容」に関してその規定関係をとやかく穿さくしたのではない。結論はそれ故極めて単純明瞭である、即ち、共同差別的諸意味の「絶対性」「相対性」という「様相」

(22) 藤田省三「維新の精神」みすず書房 7ページ

は、経済的諸条件の「絶対性」「相対性」に対応されると推定されること、これだけである。マルクス自身、人類の「前史」に後続する「真の歴史」を夢想しつつも、この過程と「自由」の門前に辿り着いた人間を、既に頭の中で描ききっていたのではないか、ちょうどその師が世界史の完成図を得々として誇示しながら、最も厭うべきはずの恣意的主観性の中で自瀆に溺れていたように。

かくして今日に生きるわれわれは（面白いことに、マルクスの予想が的中したかのように振舞っているのは、「東洋」の「先進国」住民である日本人である）、「無差別的個別者」を間断なく製造してくれる経済的諸条件の恩恵に浴することになったのだが、既に過去のものとしたあの悪夢のような共同差別的意味は、或は、折角手に入れた「われなるわれ」の宝玉を偏狭な「われわれなるわれ」で曇らせる「悪霊」は、真実永遠に心暖い「寛恕」のミココロをもち続けてくれるのであろうか。この豊満な自己完結的個別者の中に仮眠している共通の規定を霊媒よろしく呼び起こして、その「驕慢な」自我の自惚れを叱責し、「個」を超えた全体の中に再び融合させることによって、本源的共同体の「捲土重来」と名づけたくなるような「復讐」をやったのけるようなことはあるまいか。もし共同差別的な意味を醸成する基体が天与の定めとしてあるならば（人種はまさに an sich な差別的所与ではないのか）、「われなるわれ」の現実は無情なうつし世であり、文字通り「邯鄲の夢」にすぎない。しかしこのような老婆心は、昼夜を問わずテレビに出没するこわいものなしの醜怪な「居直リスト」の群れに睥睨されては、こそこそと怯懦な観察者の懐に戻ってグチをこぼすしかない、影を投げかける心配のない日陰の余計者として。

（筆者の住所：東京都日野市新井842-9-301）